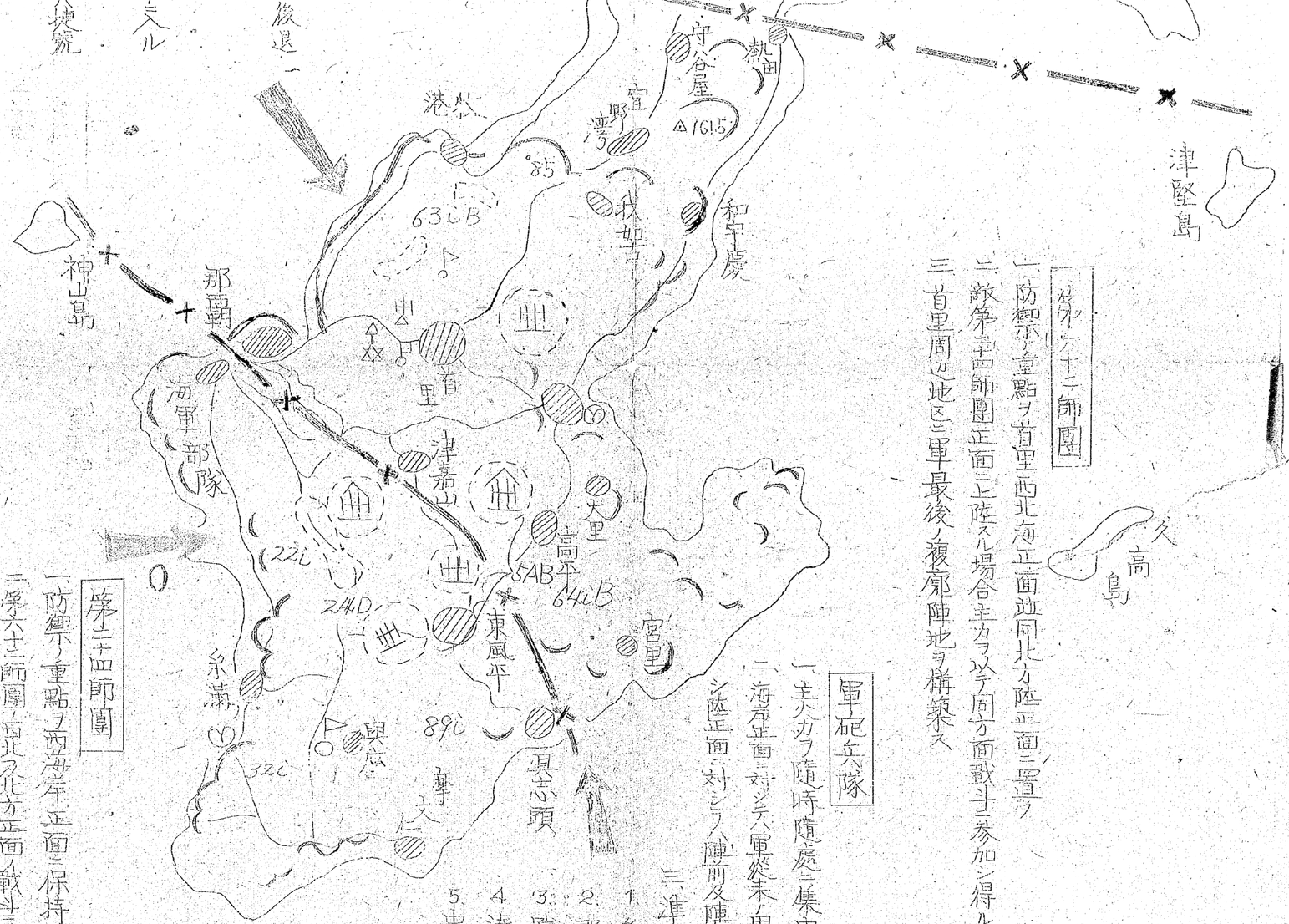
部島尻地區を占領し島尻地區主防禦陣地帶沿岸に於ては敵の上陸を破摧し北方主陣地帶陸正面に於ては戦略持久を策す敵が北、中飛行場方面に上陸する場合は主力を以て同方面に出撃することあり

指導要領

兵團部署　要圖第二の如し



第六十三師團

一、防禦ノ重點ヲ首里西北海正面並同北方陸正面ニ置ク

二、敵第三十四師團正面ニ上陸スル場合主力ヲ以テ同方面戰ニ參加シ得ル如ク準備ス

三、首里周辺地区ニ軍最後ノ複郭陣地ヲ構築ス

軍砲兵隊

一、主力ヲ隨時隨處ニ集中シ得ル如ク準備ス

二、海岸正面ニ対シ兵團終末ノ思想ニ基ク橋頭堡殲滅射撃ヲ準備

三、陸正面ニ対シテハ陣前及陣内ニ於テ敵攻撃ヲ破摧スル如キ各準備ス

三、準備ノ順序ヲ左ノ如ク定ム

1. 糸満方面
2. 那覇北方正面（殆ド完了シアリ）
3. 陸正面
4. 湊川正面（相當準備進捗シアリ）
5. 中城湾正面

軍船舶團

一、中頭地区ニ在リシ海上挺進戰隊ヲ軍主陣地内ニ後退セシム

二、嘉手納以南西海岸並ニ南海岸ニ上陸スル敵ニ対シテハ其前衣金ヲ擧ゲテ周地ニ敵輸送船団ヲ攻撃ス中城湾方面ニ上陸スル場合主力ヲ以テ右準ニ攻撃ス

第二十四師團

一、防禦ノ重點ヲ西海岸正面ニ保持ス

二、第六十三師團ノ西北及北方正面ノ戰斗ニ參加シ得ル如ク準備ス

三、海軍根據地隊ヲ其指揮下ニ入ラシム

四、新作戰計畫の企圖するところを說明せば左の如し

1、捷號作戰に於ては徹底せる決戰主義なりしも新作戰計畫に於ては戰略持久の思想を基本方針とし若し敵が軍主力の防禦地帶沿岸に上陸する場合は之を海岸地帶に擊滅するの企圖と希望を有せり

2、兵力を占領地域に適合せしむる爲中頭地域を放棄し軍主力を島尻地區に集結せり

3、混成旅團主力を島袋附近の要點に配置し城外支隊的任務を附與せしは北、中飛行場に對する中央部の關心を慰撫せんとする術策にして之を支撐として軍主力が該方面に出擊することあるを作戰方針に記述せるは同一目的に出でしものなり蓋し軍は混成旅團の城外支隊式用法竝に此の種軍主力の攻勢は害のみ多くして益極めて尠しと判斷しありたればなり

4、北、中飛行場の敵の使用妨害は主として主陣地帶内に在る長射程砲（十五糎加農）の威力に期待せり

5. 主陣地帯内海岸地帯に於ける敵撃滅の理論的根據は捷號作戰の場合と同一なり寧ろ新作戰計畫に於ては防禦地域狹少となり砲兵火力及部隊の機動運用著しく簡單容易となりしを以て攻撃成功の算確實化せりと思考せり

五、新作戰計畫策定に際し研究せし主要なる諸案左の如し

第一案

混成旅團は依然伊江島及本部半島に第二十四師團も亦概ね舊配置に在らしめ爾餘の軍主力は沖縄島南半部を撤して國頭郡山嶽地帯に轉移し戰略持久を策す

第二案

實際に採用せし案

第三案

第二案と概ね同一思想なるも軍主力を以て中頭郡地區を占領する案

第四案

第二案作戰の場合と同一構想を以て中頭島尻兩郡内敵の上陸點に軍主力を機動集中し決戰を求めんとする案

第二案を採用するに至りしは第五項に記述せる根據に基くの外第一案は軍自体の持久は戰略的價値に乏しく第三案は重要飛行場を直接確保し作戰上不利、第四案は軍の兵力激減の結果攻撃成功の算鮮しとの判断に據るものなり又第一、三、四案は現態勢より新態勢に轉移する上に於て既設築城の利用、集積軍需品の輸送等に於て著しく不利なれば

六、各兵團は新作戰計畫に基き一月末より十二月上旬に亘り新作戰地域に轉移し新たなる築城訓練に着手せり

然れども各兵團部隊が眞劍に築城訓練を開始せるは昭和二十年一月以降のことにして其の遲延の主なる理由左の如し

1. 精鋭なる第九師團其の他兵力の抽出轉用に因る志氣の沈滯
2. 過去數ヶ月に亘る訓練築城に對する必死の努力が水泡に歸せる事實
3. 築城材料（坑木の所要量は莫大にして一兵團の爲に數萬本を必要とす）軍需品等の新作戰地域への輸送難
4. 新居住設備（軍に於ては軍紀風紀の維持上住民との混住を嚴禁せり）の爲の努力

七、作戰計畫一部の變更

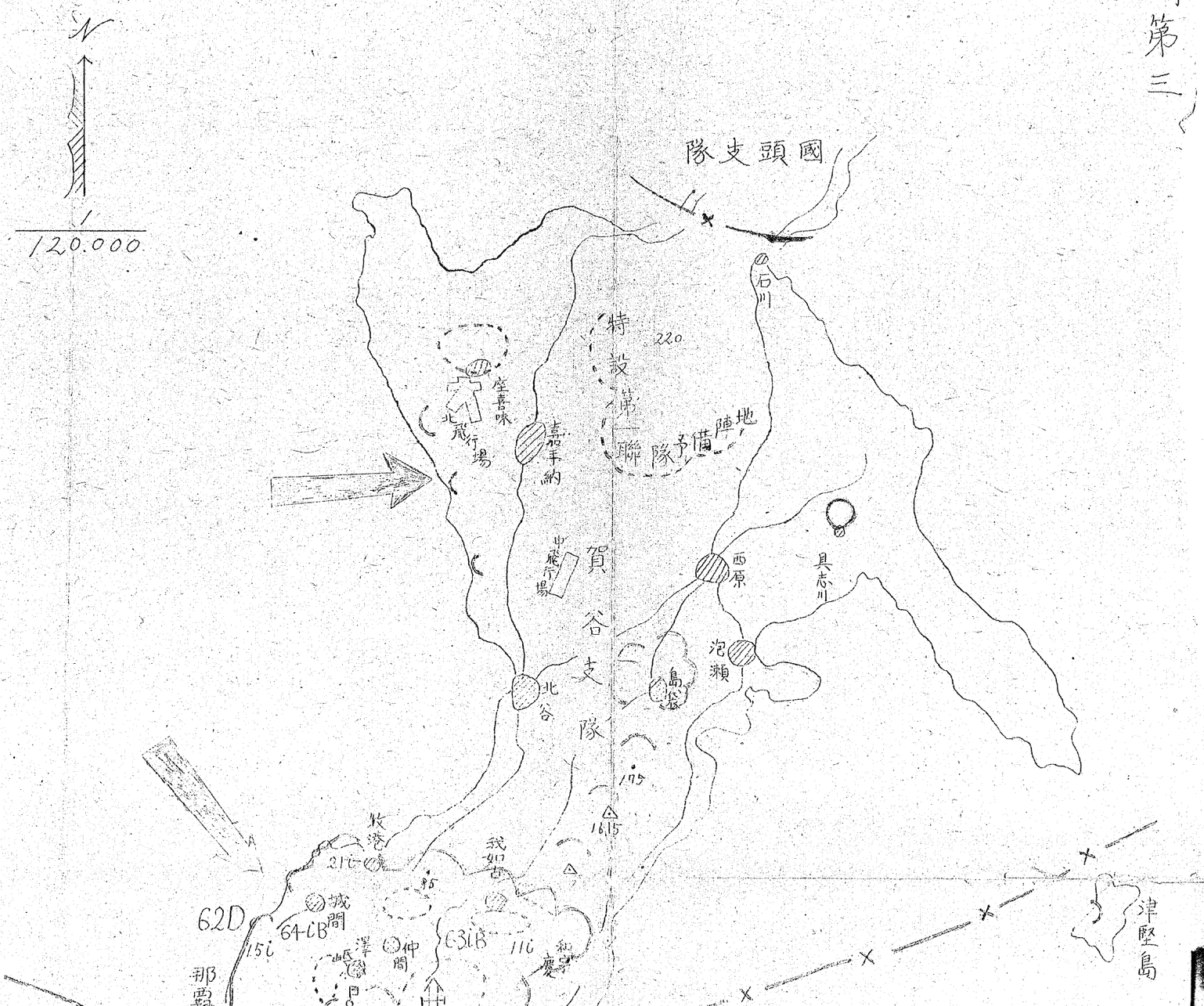
混成旅團を島袋附近に配置せる軍の眞意は前述の通りなるか軍の主陣地帶を具に巡視し其の正面と兵力の關係を檢討するに未だ正面過廣にして安心を許さず少くも歩兵一大隊の占領正面を二粁程度に緊縮せざるべからず戰術上の要求は嚴肅にして些の僞裝虛飾を許さず茲に於て軍は豫予たる決心を以て一月中旬混成旅團を主陣地帶内に撤退せしむると共に北、中飛行場方面に對する軍主力の出擊企圖を完全に放棄せり

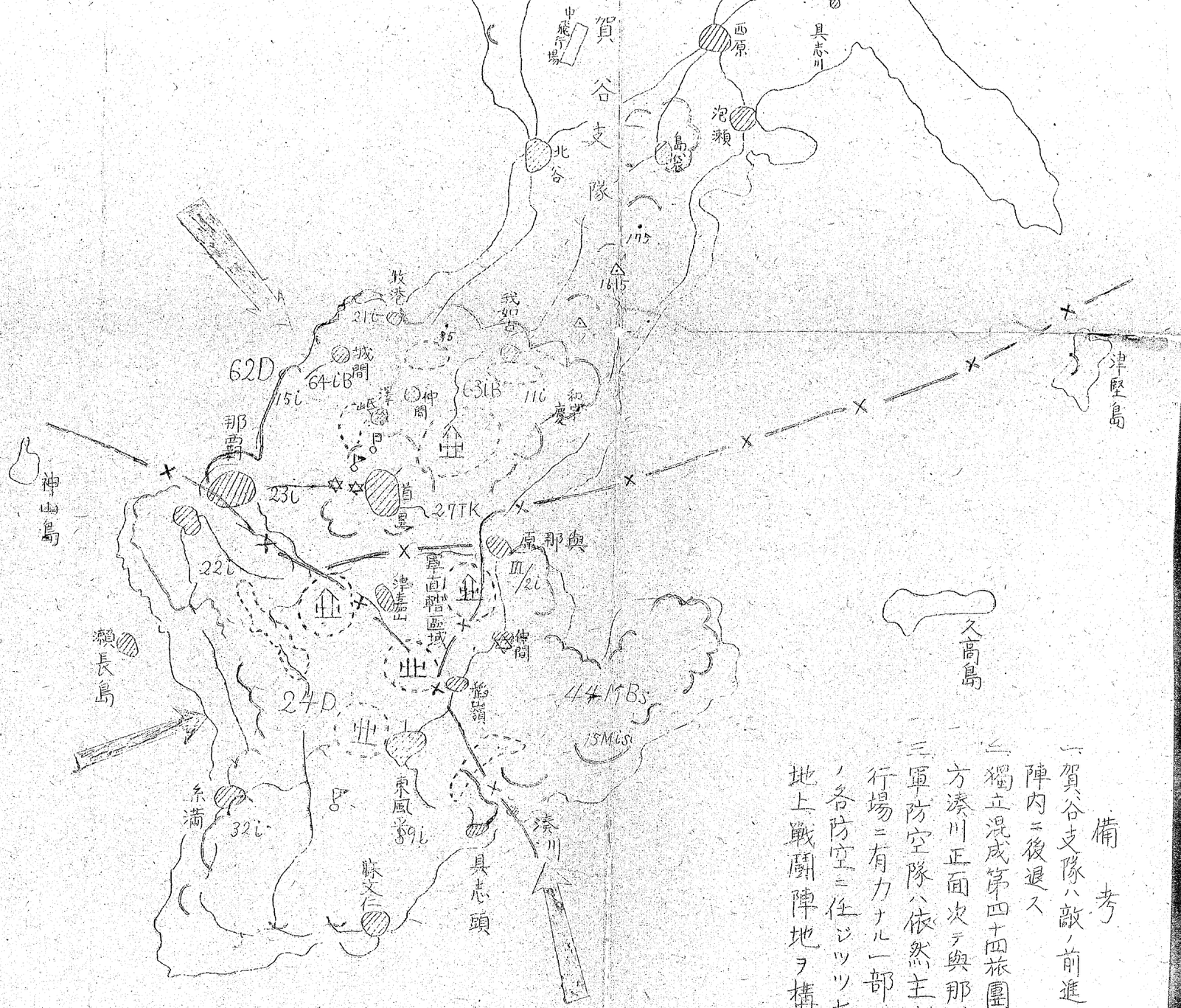
混成旅團撤退後に於ける軍主力の兵力部署の概要要圖第三の如し

要圖第三

第三十二軍兵團部署要圖

(於昭和二十年一月中旬以降)





備考

一、賀谷支隊ハ敵ノ前進ヲ遅滞セシメツツ主陣内ニ後退ス

二、獨立混成第四十四旅團ノ防禦ノ重點ハ南方湊川正面次テ與那原正面トス

三、軍防空隊ハ依然主力ヲ以テ北、中飛行場ニ有力ナル一部ヲ以テ那覇地區ノ各防空ニ任ジツツ夫々主陣地内ニ地上戰鬪陣地ヲ構築ス

八、北、中飛行場の確保に關する論爭並に兵力強化問題

陣容新作戰計畫に基き北、中飛行場を主陣地帶外に置き該地區に於

ける第二十四師團を島尻方面に移動せしむるや臨海各方面に於て相

當の難色あり更に混成旅團を主陣地帶内に撤收し該方面への軍主力

出撃の企圖をも放棄するに及び其の悲氣愈々悪化し中央部に勿論軍

參謀空部隊も北、中飛行場地區再強化の要求熾烈なり

軍主脳部は他の何人よりも北、中飛行場の戰略價値上の價値を深く

認識しあり此の二大飛行場は一度敵の奪取目なる攻撃を受くるに至

れば南西諸島中他の飛行場と同樣先ず敵空軍に制壓せられ次で敵艦

砲の有效射程下に曝さるべきを以て故に我が空軍の爲め使用價値は殆ど

皆無に近きこと明瞭にして同地は勉めて永く敵空軍をして之を利用

せしめざるにあり

混成一旅團程度の兵力を廣大にして地形薄弱なる該地區に配置する

も從來の戰例に明なる如く其の持久日數は兩三日を出でざるべく可

撃其の代償として軍保有戦力の数分一を一挙にして消耗せざるべからず斯かる程度の持久ならば軍は主陣地帯内の長射程砲に依り易々として其の目的を達し得べしと思考せり

眞に北、中飛行場の使用妨害の實效を期せんとせば徹底的に軍の兵力を増加せざるべからず茲に於て軍は聯合艦隊及關係現地陸海航空部隊と相提携し大本營に對し兵力増加に關する意見を具申せり之に對し昭和二十年一月二十三日在姫路第八十五師團を沖縄に増遣すべき大本營命令あり一同欣喜せしも同日夕取消電報來著し且目今第三十二軍には兵力を増加せざるも軍需品は能ふ限り追送すべき中央の方針明瞭となれり

依つて軍は依然北、中飛行場地區に對する處置は變更せず幾多の經緯を經たる後第十方面軍（大本營）との間に左の如き了解を以て戰闘を開始するに至れり

イ、第十方面軍は台湾教導聯隊を沖縄に急派し第三十二軍は之を以て北、中飛行場を直接防禦す

ロ、第三十二軍は主陣地内よりする長射程砲に依り極力長期且有效に北、中飛行場を制壓す

ハ、特設第一聯隊（兩飛行場地區に展開しある第十九航空地區司令部指揮下）

ニ、特設第六十二師團の前進部隊たる獨立歩兵第十二大隊は飛行場地區に於て眞面目なる持久戰闘を實施す

ホ、義烈斬込部隊を陸海軍方面より急襲せしめ兩飛行場を擾亂す

九、兵力の量力増強

第三十二軍には兵力を増強せずとの大本營の方針を承知し且刻々情勢の緊迫しつつあるを感知せるも一日と雖も爲すところなく空如たるを得ず凡ゆる手段を盡して戰力の量力増強に努力せり

第二期作戰準備間に軍の實施したる兵力増強の諸施設の概要左の如

イ、獨立大隊七ヶ大隊の編成

海上挺進基地大隊は總員約九百名を有し二勤務中隊と一整備中隊より成り其の平均年齢は大隊に依り差異あるも三十二　三才乃三十五、六才にして既教育兵頗る多く全員小銃を携行す

大隊の任務は海上挺進戰隊の攻擊資材（主として攻擊用の發動艇及爆藥）の掩護、秘匿、泛水等の工事及整備並に戰隊の宿營給養等を擔任するに在り昭和二十年の初頭に於ては既に以上諸工事は概成しありて斯かる有力なる部隊を單に出擊時の泛水の爲に存置するは軍全般の作戰上の要求より見て矢當なり依つて各大隊の整備中隊は各戰隊に配屬存置し爾餘は獨立第一乃至第三大隊同第二十六乃至第二十九大隊と改稱し純然たる戰鬪任務に服せしむるに決せり

各獨立大隊は從來の裝備の外輕機、重擲各十數挺、重機數挺を增備せられ平均總員約六百、七ヶ大隊合計約四千にして第二十四、第六十二兩師團長及獨立混成第四十四旅團長の指揮下に分屬し教育訓練の精到を期せり

ロ、特設諸部隊の編成

後方諸部隊と雖戰鬪開始後は島嶼守備隊の特性に鑑み其の主力を以て純戰鬪に參加せしむるを有利とす依つて軍は後方諸部隊を戰鬪に便なる如く假編成し之に相當數の自動火器、重擲、小銃、急造爆雷等を增加裝備し左の如く特設部隊を假編成せり

特設第一師團

第十九航空地區司令部以下北、中飛行場地區に在りし飛行場大隊二、特設警備工兵隊二、要塞建築勤務中隊一等を基幹として編成す

總員約三千なり

特設第一旅團